

品目	1 アクリルアミド及びこれを含有する製剤	2 亜硝酸塩類
		亜硝酸塩類
廃棄方法	(1) 燃焼法 アフターバーナーを具備した焼却炉で焼却する。 水溶液の場合は、木粉（おが屑）等に吸収させて同様に処理する。	(1) 分解法 (ア) 亜硝酸ナトリウムを水溶液とし、攪拌下のスルファミン酸溶液に徐々に加えて分解させた後中和し、多量の水で希釈して処理する。 (イ) 亜硝酸ナトリウムを水溶液とし、加温、攪拌しながら塩化アンモニウムを少量ずつ加えて分解させた後冷却し、更に、残存する亜硝酸ナトリウムは（ア）の方法で処理する。 〈備考〉 ア（イ）の亜硝酸ナトリウム溶液の濃度は20%以下とし、反応液の pH はおおむね 5～7 とする。 イ（イ）の加温温度は約 85℃とする。 ウ 分解の際発生する窒素ガスで、反応液が●●いつ流しないように注意する。 エ 約1時間の加温、攪拌で約80%分解する。
生成物		N ₂ Na ₂ SO ₄ 等
検定法	ガスクロマトグラフ法 (臭素化後)	吸光光度法 滴定法
その他		

3 アニリン	4 アニリン塩類
(1) 燃焼法 可燃性溶剤と共に、焼却炉の火室に噴霧し、焼却する。 (2) 活性汚泥法	塩酸アニリン (1) 燃焼法 スクラバーを具備した焼却炉で焼却する。 (2) 活性汚泥法 〈備考〉 ア (1) のスクラバーの洗浄液には、アルカリ溶液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するに適したものとする。
ガスクロマトグラフ法 吸光光度法	ガスクロマトグラフ法 (遊離後)

5 エチレンクロロヒドリン(2-クロロエタノール) 及びこれを含有する製剤	6 カリウム
(1) 燃焼法 可燃性溶剤と共にスクラバーを具備した焼却炉で焼却する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液にはアルカリ液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するに適したものとする。	(1) 燃焼法 スクラバーを具備した焼却炉の中で乾燥した鉄製容器を用い、油又は油を浸した布等を加えて点火し、鉄棒でときどき攪拌して完全に燃焼させる。残留物は放冷後水に溶かし希硫酸等で中和する。 (2) 溶解中和法 不活性ガスを通じて酸素濃度を 3%以下にしたグローブボックス内で乾燥した鉄製容器を用い、エタノールを徐々に加えて溶かす。溶解後水を徐々に加えて加水分解し、希硫酸等で中和する。 〈備考〉 ア (1) のスクラバーの洗浄液には水を用いる。 イ 燃焼の際発生する煙は有害であるので皮膚に触れたり吸入しない。 ウ (1) における「完全に燃焼」とは燃えきって自然に火の消えた状態をいう。 エ 油、布等は水分のないものを用いる。 オ 鉱油中に分散したカリウム (いわゆるディスパーズド・ポタシウム) は少量ずつ焼却する。 カ (2) のエタノールは純度 95%以上のものをカリウムに対して 60 倍容量以上用いる。 キ (2) の溶解時発生する水素は、不活性ガスと共に流動パラフィンの放封びんを経て放出する。 ク (2) の溶解操作中は保護面を必ず着用する。
	K ₂ SO ₄
ガスクロマトグラフ法	pH メーター
	ア カリウムはナトリウムと比較して反応が激しいので取り扱いには注意する。 イ カリウムは水、二酸化炭素、ハロゲン化炭化水素等と激しく反応するので、これらと接触させない。

7 カリウムナトリウム合金(ナトリウムカリウム合金)	8 キシレン
(1) 燃焼法 スクラバーを具備した焼却炉の中で、あらかじめ流動パラフィンを入れた乾燥した鉄製容器を用い、油又は油を浸した布等を加えて点火し、鉄棒でときどき攪拌して完全に燃焼させる。 残留物は放冷後水に溶かし希硫酸等で中和する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液には水を用いる。 イ 燃焼の際発生する煙は有害であるので皮膚に触れたり吸入しない。 ウ 「完全に燃焼」とは燃えきって自然に火の消えた状態をいう。 エ 流動パラフィン、油、布等は水分のないものを用いる。 オ 流動パラフィンはカリウムナトリウム合金に対して3倍容量以上用いる。	(1) 燃焼法 (ア) ケイソウ土等に吸収させて開放型の焼却炉で少量ずつ焼却する。 (イ) 焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。
K ₂ SO ₄ Na ₂ SO ₄	
pH メーター	ガスクロマトグラフ法
ア カリウムナトリウム合金は液体であり、カリウム及びナトリウムと比較して、水、二酸化炭素、ハロゲン化炭化水素等とより激しく反応するので、これらと接触させない。 イ 保管に際しては、充分乾燥した鋼製容器に納め、アルゴンガス(微量の酸素も除いておくこと。)を封入し、密栓する。他の名称：ナック、NaK	

9 クレゾール及びこれを含有する製剤	10 クロロエチル（塩化エチル）
（１）燃焼法 （ア）木粉（おが屑）等に吸収させて焼却炉で焼却する。 （イ）可燃性溶剤と共に焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 （２）活性汚泥法	（１）燃焼法 スクラバーを具備した焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液にはアルカリ溶液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するに適したものとする。
ガスクロマトグラフ法	ガスクロマトグラフ法

11 クロルピクリン（クロロピクリン）及びこれを含有する製剤	12 酢酸エチル
（１）分解法 少量の界面活性剤を加えた亜硫酸ナトリウムと炭酸ナトリウムの混合溶液中で、攪拌し分解させた後、多量の水で希釈して処理する。 〈備考〉 ア 混合溶液の亜硫酸ナトリウムの濃度は 30%、炭酸ナトリウムの濃度は約 4% とる。 イ 混合溶液はクロルピクリンに対して 25 倍容量以上用いる。 ウ 分解は液中の油滴及び刺激臭が消失するまで行う。	（１）燃焼法 （ア）ケイソウ土等に吸収させて開放型の焼却炉で焼却する。 （イ）焼却炉の火室へ噴霧し焼却する （２）活性汚泥法
ガスクロマトグラフ法 吸光光度法	ガスクロマトグラフ法

[illegible]

15 脛酸及びこれを含有する製剤	16 脛酸塩類及びこれを含有する製剤
(1) 燃焼法 焼却炉で燃焼する。 (2) 活性汚泥法 ナトリウム塩とした後、活性汚泥で処理する。	(1) 燃焼法 焼却炉で焼却する。 (2) 活性汚泥法 活性汚泥で処理する（可溶性塩に限る）
滴定法	滴定法
	脛酸の重金属塩で爆発性のものは（1）の廃棄法は行わない。

17 トルエン	18 ナトリウム
(1) 燃焼法 (ア) ケイソウ土等に吸収させて開放型の焼却炉で少量ずつ焼却する。 (イ) 焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。	(1) 燃焼法 スクラバーを具備した焼却炉の中で乾燥した鉄製容器を用い、油又は油を浸した布等を加えて点火し、鉄棒でときどき攪拌して完全に燃焼させる。残留物は放冷後水に溶かし、希硫酸等で中和する。 (2) 溶解中和法 不活性ガスを通じて酸素濃度を 3%以下にしたグローブボックス内で乾燥した鉄製容器を用い、エタノールを徐々に加えて溶かす。溶解後水を徐々に加えて加水分解し、希硫酸等で中和する。 〈備考〉 ア (1) のスクラバーの洗浄液には水を用いる。 イ 燃焼の際発生する煙は有害であるので皮膚に触れたり吸入しない。 ウ (1) における「完全に燃焼」とは燃えきって自然に火の消えた状態をいう。 エ 油、布等は水分のないものを用いる。 オ 鉱油中に分散したナトリウム（いわゆるディスプレイーズ・ソジウム）は少量ずつ焼却する。 カ (2) のエタノールは純度 95%以上のものをナトリウムに対して 60 倍容量以上用いる。 キ (2) の溶解時発生する水素は不活性ガスと共に流動パラフィンの液封びんを経て放出する。 ク (2) の溶解操作中は保護面を必ず着用する。
Na ₂ SO ₄	
ガスクロマトグラフ法	pH メーター
	ナトリウムは水、二酸化炭素、ハロゲン化炭化水素等と激しく反応するので、これらと接触させない。

[illegible]

21 フェノール及びこれを含有する製剤	22 ブロムエチル（臭化エチル）
（１）燃焼法 （ア）木粉（おが屑）等に混ぜて焼却炉で焼却する。 （イ）可燃性溶剤と共に焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 （２）活性汚泥法	（１）燃焼法 可燃性溶剤と共に、スクラバーを具備した焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液には、アルカリ溶液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するに適したものとする。
ガスクロマトグラフ法 吸光光度法	ガスクロマトグラフ法

23 ブロムメチル（臭化メチル）及びこれを含有する製剤	24 削除
（１）燃焼法 可燃性溶剤と共に、スクラバーを具備した焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液にはアルカリ溶液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するに適したものとする。	
ガスクロマトグラフ法	

25 メチルエチルケトン（エチルメチルケトン）	26 削除
（１）燃焼法 （ア）ケイソウ土等に吸収させて開放型の焼却炉で焼却する。 （イ）焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。	
ガスクロマトグラフ法	